

氏名	岩谷 秋美
ヨミガナ	イワヤ アキミ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第422号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ウィーンシュテファン大聖堂 後期ゴシックにおけるハプスブルク家の聖堂造営理念

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	田辺 幹之助
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	越川 倫明
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤 直樹
（副査）	東京藝術大学	名誉教授		越 宏一

（論文内容の要旨）

ウィーンを中心部に聳えるシュテファン大聖堂は、ハプスブルク家の皇帝霊廟として建設された、オーストリア、および、ドイツのゴシック建築を代表する聖堂である。造営はおよそ二百年もの長きにわたり、その期間中に、各時代の最新の様式が導入され、また、施主の意図も移り変わった。その結果、大聖堂には、実に様々な時代の要素が混在しているが、それにもかかわらず、全体の調和が保たれている。先行研究では、大聖堂の複雑な造営経緯、および、建築図像の解明に注力されてきたが、聖堂がうみだす荘厳な効果が、いかなる建築的構造や装飾を通じて導き出されたのか、その原理は、いまだ明らかにされていない。

そこで筆者は、独自の個性をもつ各々の要素が混在する経緯に着目し、各要素の造形と、それが決定された意図を検討することによって、シュテファン大聖堂の造形原理が明らかになると考えた。殊に注目するのは、造営の最終局面となった、15世紀中葉である。この時、ハプスブルク家のフリードリヒ三世（reg. 1440-1493）の命を受けて大聖堂を完成に導いた棟梁には、およそ二つの課題が課されたと仮定した。その課題とは、第一に、造営主フリードリヒ三世の政策上の意図から要請される課題であり、第二に、造営長期化の結果として混在した諸要素を調和的に共存させようとする、審美上の課題である。この両課題を解決することで初めて、伝統と革新性が共存するという、シュテファン大聖堂の独自の造形が実現されるに至ったのである。

興味深いことに、この解決に際し、外観と内部空間で、それぞれ対照的ともいえる方法が採られている。論文では、外観と内部空間を、第I部と第II部に分けて考察し、その特質の解明に努めた。

第I部では、外観における図像、および、造形の考察に基づきつつ、歴代造営主の造営意図に着目することによって、聖堂の造形が決定されてゆくプロセスを明らかにする。ロマネスク期、当時のウィーンの君主であったバーベンベルク家がザンクト・シュテファン聖堂の建設に着手した目的は、ウィーンに司教座を設置し、宗教的独立を果たすことにあった。これは、同家の断絶後も、ハプスブルク家のフリードリヒ三世よって1480年にカテドラル昇格が果たされるまでの約三百年の間、ウィーンの君主とウィーン市民の悲願であり続けた。14世紀中葉になると、ハプスブルク家の権威を示すことを目的として、聖堂は、〈皇帝大聖堂（Kaiserdome）〉という象徴性を担うようになる。ただし、〈皇帝大聖堂〉のシンボルとなる多塔の構成要素として着工された南塔は、ハプスブルク家の内紛が生じている間、同家に代わり造営を率いた市民によって、市民の象徴たる単塔へと変更されてしまった。

以上の変転を経て、1440年、王位に就いたフリードリヒ三世は、〈皇帝大聖堂〉の理念を復活させ、外陣の建設に着手する。この時、外陣には、南塔の大トレーサリーと類似した飾破風が設けられた。先行研究は、南塔の大トレーサリーと外陣の飾破風が調和した関係にあるがために、全てが予め計画されていたと考えた。

しかし筆者は、外陣の飾破風については、フリードリヒ三世の治世下における、〈皇帝大聖堂〉のコンセプトの復活を機に、新たに発案されたものとする。南塔の大トレーサリーという既存モチーフを、外陣の飾破風へ転用するというアイデアによって、市民の単塔と化した南塔を、再び君主の多塔というコンセプトへ取り込むことに成功したのである。

第II部では、15世紀後半に建設された外陣空間を中心に、内部空間について考察する。ここで注目されるのが、外陣にて採用された、段形ホール (Staffelhalle) という特殊な建築タイプと、その独創的なネット・ヴォールトである。両者には共に、ゴシックからルネサンスへの「移行期」という、新しい時代の特徴が観察される。ところが、外陣において、最新の革新的な造形が実現されてしまったため、これより約百年前に建設されていた、古く簡素な内陣空間との間に、齟齬をきたす結果となった。換言すれば、外陣にて段形ホールとネット・ヴォールトを用いる策は、第I部の外観の考察にて観察された、既存の要素を転用して調和的な共存を果たすという解決策とは、真逆の決断だったのである。

先行研究は、段形ホールについて、構造上の副産物と見なし、ほとんど注目してこなかった。また、ネット・ヴォールトに関しても、建築の表層を彩る装飾要素としての価値を認める一方で、その空間効果を積極的に評価することはなかった。これに対して筆者は、段形ホールとネット・ヴォールトの真の意図は、逆説的ながら、空間全体のハーモニーを第一義に置いたものだと考える。すなわち外陣の造形は、「移行期」に発達した新しい表現力を駆使し、旧時代の古びた様相を呈するホール式内陣を、聖域にまで高める効果を狙ったものだったのである。こうして、伝統的な諸要素を、聖堂の秩序の中に取り込みつつ、新しい時代の革新的な空間として、シュテファン大聖堂は完成に至ったのである。

(総合審査結果の要旨)

本論文はハプスブルク家の皇帝霊廟として建設されたウィーンのシュテファン大聖堂を研究対象とする。シュテファン大聖堂は1304年から1480年頃までの造営期間中に多彩な建築様式が混在すると同時にそれが調和的に統一された、中部ヨーロッパを代表する後期ゴシック聖堂建築である。論文は2部からなっている。筆者は序の部分でまず200年近くに及ぶ造営史と先行研究を検討し、これまでの研究が具体的な造営の経緯や部分的な建築形態に向けられており、造営の経過を通じて建築の構成要素がどのように結合され調和のとれた聖堂建築に結実したかについての総合的な知見は示されていないと指摘する。そして、とりわけ最終局面となる皇帝フリードリヒ3世が造営主となった15世紀中葉の建築状況に焦点を当て、建築造営の意図と構造の分析を行うことで本聖堂の建築及び空間造形に対し総合的な評価を試みることを、本論文の目的として提示する。

その後続く論文の第1部では、聖堂外観の分析が行われる。第1部の第1章で筆者は、バーバンベルク家によって12および13世紀に建てられた旧聖堂の時代から、本聖堂には常に司教座昇格の意図が託されていたことを論証し、14世紀初頭にアプシスがゴシック式のホール状内陣に改築されたことも、こうした意図に関連づけられることを明らかにする。その上で第2章では、バーバンベルク家に代わってオーストリア公になったハプスブルク家のルドルフ4世が本聖堂に、伝統的な君主のカテドラルとしての多塔式の宮廷礼拝堂というコンセプトを加えたことを記す。

続く第3章では、ルドルフ4世没後、ハプスブルク家の分裂期にウィーン市民が主導して建築を進めた巨大な南塔に対する分析を行っている。筆者は、この造営段階で同聖堂を市民的な都市聖堂の表徴である単塔式の建築とする新たなコンセプトが現れ、ルドルフ4世の多塔式建築に大きな変更が加えられたことを指摘すると同時に、南塔を当時の柔軟様式建築の傑出した例として位置づけることに成功している。この分析によりつつ第4章ではまず、皇帝フリードリヒ3世がふたたびハプスブルク家の造営主として同聖堂の完成を意図した時、単塔式聖堂としてのコンセプトのもとに巨大化した南塔をいかに皇帝大聖堂としての建築全体に取り込むかという点が新たな課題として浮かび上がってきたとする。そして筆者は、「フリードリヒ破風」と呼ばれる聖堂の外陣部を飾る破風と南塔破風飾の連続性に着目し、この外陣破風の特徴的なモチーフが南塔を建築の全体に再度融合させるための創意であったとする。この破風モチーフはこれまでの研究では

外陣構想の当初からあったものと考えられていたが、筆者はその意図について、造営経緯に対する丹念な調査と緻密な形態分析を通じて新たな説を提示している。

この後の第2部で筆者は、視点を内部空間に転じる。そして内部空間を特徴づける要素として外陣の段形ホール形式とネットヴォールトの形態に着目し、その分析を行っている。第1章でまず取り上げられるのは段形ホールである。身廊部の天井が側廊部より一段と高くなっているもののクリアストリを欠くために身廊上部が暗くなるこの建築形式は、これまでの研究では、巨大な南塔に合わせて巨大化した屋根を支える実用的な目的で採用されたという説が有力であった。しかし筆者はその空間効果に着目して、それ自体では単調な印象を与える内陣部のホール式建築に対し、内部空間にヒエラルキーを生み出し大聖堂建築に相応しい空間効果をもたらすための創意だったことを、他の聖堂建築と比較検討しながら述べている。さらに第2章では、そのような空間効果をもった建築が皇帝権力の表徴と結びつく可能性を、フリードリヒ3世を巡る皇帝図像を検討することによって示唆し、とりわけ建築内の光の効果の意味について、フリードリヒ3世の顧問、後の教皇ピウス2世が造営主となったピエンツァ聖堂の例を挙げて説明している。

第3章で取り上げるのはネットヴォールトの問題である。筆者が記している通り、本聖堂の複合的な外陣ネットヴォールトの造形的意図に関してはこれまでほとんど触れられることがなかった。これに対して本論文では、細密な形態分析を通じ、段形ホールの空間効果を補完する機能をネットヴォールトに認めている。またその際、外陣ヴォールトを架構したふたりの棟梁、プクスバウムとその跡を継いだシュペニングの個人様式に触れ、ゴシック期からルネサンス期にかけてネットヴォールトが独自の表現領域に昇華した可能性について考察を加えている。さらに第4章では、本聖堂の建築図面を検討することによってふたりの棟梁の個人様式に対する検討を進め、ヴォールトの構造がプクスバウムの意図を継承するかたちで創意を發揮したシュペニングのものであったとする。そして外陣部のヴォールトは鑑賞者の注意を身廊に引き寄せ内陣へと導きつつ外陣空間と内陣空間の断絶を明示するという複合的な機能を担うものであったことを明らかにする。

段形ホールとヴォールトに対する上記のような分析を踏まえ、第5章では内陣建築の特質と、本聖堂の建築全体におけるその効果について記している。そして均質な光に満ち溢れたホール状建築の内陣は、外陣の段形ホールとヴォールトによって差異化されつつ接続されることで、初めて視覚的にも聖域化されるものであったとする。以上のような分析を経て、筆者は、さまざまなかたちで対立する様式を所与の条件として自らの創意に組み込み、最終的に、フリードリヒ三世の皇帝大聖堂に対する要請にこたえる形で実現したのが本聖堂であったと結論づけるのである。

申請者の論文は、複雑な造営の経緯を多大な資料を通じて把握しつつ、その知見を造形分析に結び付けているが、このような分析を筆者は、長期にわたる現地調査によって得られた比較作例をカタログ化する地道な作業のもとに行っている。観察の視点は総合的な建築構造からヴォールトの構成、建築図面の様式的な検討を含み多面的・総合的であり、論証形式はきわめて論理的である。シュテファン大聖堂という壮麗な建築を歴史的な意図と結びついた包括的な造形物として説得力のあるかたちで浮かび上がらせるその試みは本論文独自のものとも言えよう。個々の論点、例えばフリードリヒ3世を巡る政治的皇帝図像と建築構造を巡る問題などについてはいまだに解決すべき点があるように思われる。とはいえ本論文は歴史的な造営の経緯や特定の建築部分に対して行われてきた従来の研究に対して、建築全体に対する総合的な観点から膨大な資料を整理し分析を加えることで独自の見解を示したと言う点において、過程博士論文に相応しい内容を備えた論考であると判断される。